

生き方

雲泉寺副住職 神田恭真

第十八教区護持会報「輪」より
—平成三十年十二月発行—

今年の春、雲泉寺住職片野徹榮老師より良縁をいただき、及ばずながら現在副住職として勤めています。雲泉寺を開かれた源翁心昭禪師や歴代住職様の重恩と共に、第十八教区御寺院の皆様を迎え入れてもらったことは有難い縁です。また、お檀家様は慣れない私に親しみをもつて接してくれました。そのお心遣いは感謝に堪えません。全くの新しい環境で龍の鬚を撫でるかもしれません。鬼が出るか蛇が出るか、できれば大したもん蛇が出てほしいところです。

私は胎内市の広厳寺で生まれました。後に修行僧として平成二十二年から二十七年までの間、愛媛県の瑞應寺と福井県の永平寺で仏道に一心帰命しました。おかげさまで無

事に修行を続けることができました。

そして三十二歳となった今、雲泉寺までの法の道を思い定めながら生活しています。私事で恐縮ですが、二十七歳の頃から雲煙的に過ごすようになり、墨蹟という禅僧の書に呼応する布教を始めました。まずは亡くなられた禅僧に挨拶をしたいと思います、禅宗僧侶の書の臨書（見てその通り書くこと）をしました。修行した瑞應寺と永平寺に残る書や他宗の書も広く臨書しました。幸い、私は字の上手下手という分別がわからなかった

ので、全ての書がお手本としてすんなり入りました。これは稽古ですが時間を超えた問答でもあり、自分の程度を思い知りました。しかし、禅師の書は現代に蘇り、禅師は再び法を説きはじめました。これによって今までの長い間とこれからの長い間に普通の教えが通りました。他に禅語や経文、達磨様の御姿を描いています。また墨蹟には筆法という秘密の体現の法があります。この法について考えなおしたりしています。これまでに書いた数千枚の書は棄てずに取

って置いてあります。この一枚一枚は小さな本当です。何れ大きな本当となって人々の信仰心に呼びかけて宗教にめぐり逢いを起こすと思っています。過ぎる日に老いた自分の様子が準備されるように歳月は応えてくれます。この言葉は仏教の情景です。墨蹟が仏の教えの情景に直通している間に月日は布教になり、生き方になりました。これが私の自己紹介です。

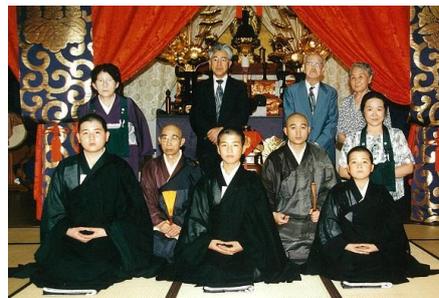


雲泉寺本堂より望む

何分私はまだ不慣れで失礼が多いかと思いますが、近隣のご寺院様、お檀家の皆様にお力添えをいただきました。雲にかけ橋ではありませんが、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

▼広厳寺住職より一言

三男恭真は十歳の時に長男、二男と三人一緒に広厳寺で私の得度を受けました。修学は北海道駒澤大学付属岩見沢高校仏教専修科、



平成8年8月5日得度式



駒澤大学仏教学部と進み、修行は寄稿文の通り、四国と福井で積み、ご縁をいただき四国瑞應寺僧堂・檜崎通元老師のもと首座を務め、後に私の法を嗣いでいます。小さい頃から書道に親しみ、大学も書道部、修行した瑞應寺でも老師方よりご指導いただき今に至りました。雲泉寺様での寝食も三ヶ月半。いつも冷静沈着、作務を欠かさず、畝江沢川の清流、土沢の峰が釈迦牟尼の声と姿、静かな環境で日々弁道精進しています。唯々身体健康であることを願うのみ。